雪降ればあの町この町ゆふぐれて四角い窓に四角い光　塩川郁子

野口雨情の童謡「あの町この町」をうまく引用しつつ、珍しく雪が降った日の東京を一首にしあげている。「あの町この町　日が暮れて……」とつづくところも、うまく踏まえている。「四角い光」はビルやマンションの灯のイメージだろう。

おれの名のラベルが貼られ液体のおれが奥へと運ばれてゆく　佐佐木定綱

液体はたぶん血液だろう。血液という語を隠し、場面や登場人物を隠して、日常の中の不思議をクローズアップしてみせた。

空き教室となりたる三年一組のラーフルが吸う七色の夢　児島直美

卒業していって今はもう誰もいなくなった高校（だろう）三年一組の教室。きれいに掃除された教室の、彼ら彼女らの名残は、昨日までのチョークの粉が残っているラーフルだけ。ラーフルとは黒板拭きのこと。ネットで見ると鹿児島県、宮崎県、愛媛県三県で使われている語らしい。もともとはオランダ語に由来するという。結句が前向きな空気を暗示している。

灯台の灯は根気良く点滅すウトロの沖の流氷に向け　三宅徹夫

オホーツク海の流氷に取材した今月の六首。大きな風景、都会にはない静寂を表現して魅力的。この一首では、

短歌の現在

No.447　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

「根気良く」が表現上のポイント。

普通とは自分をなくす事ならむ怖れずにゆけよ未来の自分　高山邦男

今月の作の冒頭三首、普通を生きる人生の貴さをうたって心にしみる。考えてみれば、地球上の動物や植物をはじめとする生き物たちは、みな普通を生きている。そうした広い裾野を想像させるところが、この作の持ち味と思う。人生訓のような歌は現代ではやらないが、そこへあえて踏み込んでいるところに注目する。

蛍の光り流るるオフィスをドローン巡り残業禁止を遍く知らす　幸野一枝

オフィスを飛び巡るドローン。ドローンが残業禁止の言葉が発するのだろう。なんだかSF映画のワンカットのような光景をあざやかに浮かび上がらせる。

仰向いて「ズボンをはいた雲」を読むズボンをはかない高慢な雲　石田郁男

今月の五首は、同音、類音の反復でリズムをとり、音楽的な効果をねらった作が多く、それなりの効果をあげているようだ。この作も有名な詩集のタイトルを引用しつつ、楽しい。「ズボンをはいた雲」は今からちょうど百年ほどまえに出版されたロシアの詩人マヤコフスキーの詩集。

水彩の色鉛筆のみずいろを大人の塗り絵の空に塗り込む　鈴木陽美

水に溶くことができる色鉛筆、大人の塗り絵、新しい